# 慶應言語学コロキアム

# チョムスキーと意味の科学
## ―名詞句の意味機能の出所をめぐって―

講演者: 西山　佑司（慶應義塾大学名誉教授）
討論者: 佐野　まさき（立命館大学）
司会・コメンテーター: 内堀　朝子（東京大学）
コメンテーター: 北原　久嗣（慶應義塾大学）

日時: 2026 年 7 月 11 日(土)～12 日(日) 13:30−18:00
会場: 慶應義塾大学三田キャンパス北館大会議室 ※対面開催のみ
使用言語: 日本語

参加申込: 研究所ホームページもしくは右のＱＲコードよりお申込み下さい
＊ 準備の都合により、事前申込をお願いいたします。
＊ 事前にお申込みいただかない方の当日参加も可能ですが、会場にて参加者カードへの記入が必要となります。
＊ 今回のセミナーは生成文法研究の専門的知識が前提となります。

第１部では、ミニマリストプログラム(MP)における Chomsky の意味論観を確認する。「Chomsky は言葉の形式面ばかり重視しており意味を無視している」と評されることがあるがこれは大変な誤解で、Chomsky ほど意味に関心を持っている言語学者はいない。実際、Chomsky(2024)は、「構造構築操作はすべて思考に関与しており、CI で解釈される意味的特性を担う」（All relations and structure-building operations (SBO's) are thought-related, with semantic properties interpreted at CI.）とする原理[T]を提示している。ただ、Chomsky は、自然言語の意味理論は syntax の一部であり、言語と世界の関係を問題にする外在主義的意味論ではなく、内在主義的意味論であるとしている点にわれわれは注目する。

第２部では、Chomsky の内在主義的意味論の立場にたって、ケーススタディとして、コピュラ文「A は B だ」("A is B")が持つ措定文(predicational sentence)と（倒置）指定文(specificational sentence)の解釈の、MP における扱いについて具体的に議論する。コピュラ文の措定 vs.指定の解釈をめぐっては、Higgins (1973)以来、多くの研究があるが、そこでは名詞句の意味機能（変項名詞句、叙述名詞句、指示的名詞句、値名詞句）が重要な役割を果たすことを論じる。そして、これらの名詞句の意味機能の統語理論上の出所が問題であることを指摘し、この点についての先行研究を検討する。とくに、西垣内泰介、外池滋生、松山哲也、豊島孝之、岸本秀樹、他諸氏による多様な説明をとりあげ、それぞれの問題点を指摘する。さらに、これらの名詞句の意味機能上の区別は、External Merge (EM)が関与する述語-項構造にも、Internal Merge (IM)が関与する談話構造や情報構造のいずれにも該当しないことを指摘する。それにもかかわらず、これらの名詞句の意味機能上の区別は、EM や IM から出てくる意味と同様、普遍文法に根ざすものになると思われ、もしそうであるならば、措定文と（倒置）指定文の意味の区別の問題は、Chomsky の Duality of Semantics 説にも大きな問題を投げかける可能性があることを論じる。

共催: 科学研究費助成　基盤研究（C） 25K04101 『併合と最小探索に基づく日英語比較研究：統辞構造はどのように生成され解釈されるのか』

主催 慶應義塾大学言語文化研究所

［お問い合わせ先］
〒108-8345　港区三田2-15-45　慶應義塾大学言語文化研究所
電話：03-5427-1595（事務室直通）　メール：genbu@icl.keio.ac.jp
http://www.icl.keio.ac.jp